

いびい

小田実 上



阿いひっひい

小田実 上



円いひっぴい上

昭和52年12月5日初版印刷

昭和52年12月10日初版発行

著者 小田実

発行者 佐藤皓三

発行所 河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五

電話 東京3555311 編集3555321

振替 東京0110802

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価は帯を御覧下さい

乱丁・落丁本は御取替え致します

©1977 Makoto Oda

作者まえがき

「一寸の虫にも五分の魂」ということばがあります。ならば、「一寸の虫」、あとの「五分」には何がつまっているのであるか。投機、金儲けの思惑、打算、処世術、人生体験から来るお説教、そうしたぐいのもろもろだけであるのか。思想というようなもの、あるいは、観念というもの、そういったものもそこにあって、なるほど、その「五分」のサイズにおさまっている以上、それは小さい。チンマリとして見える。しかし、それ自体が「一寸の虫にも……」と言っていることはないか。書棚にいかめしく並ぶ「世界大思想全集」のように、あるいは日本のお思想愛好家、文学鑑賞家こそって嘆賞するドストエ

フスキーは「カラマーゾフの兄弟」の「大審問官」のくだりのごとく、いかめしく、おどろおどろしく論じ上げているのではない。ただ、それでも、「一寸の虫にも五分の思想、五分の観念」ということもある。チマタの人びと、作者の私自身をふくめて、みんな、けっこうものを考えているのであります。明日の競馬の思惑もやっていれば、世の中のあるさま、人類の行く末のこともけっこう考えている。というわけで、この「円いひっぴい」、言ってみれば、「思想小説」であります。あるいは、「観念小説」。埴谷雄高さんのそれが闇の天空翔ける馬のものであるなら、これはあくまで「一寸の虫」のもので、地を這っています。

円
い
ひ
つ
ぴ
い
上

酒を飲んでいるときやった。このごろはめつきり弱うなつてもうて、昔のように一升酒というわけにいかん。五合も飲めばてきめに眠とうなつてもうて、あぐくのはては酔いつぶれ、いや、眠りつぶれや。つまり、どこでもよろしいから、そのまま眠り込んでしまふ。このあいだなんか、気がついてみたら、駅のきわの共同便所のまえに坐つていよつた。このごろの子供みたいに坐つていのか寝そべつていのか判らんようならしない坐り方しているのやあらへん。コンクリートの床の上にアグラかいて坐つて、背筋は支えもなしにまっすぐにしていた。飲んでいるときは駅前通りの「おばはん」で飲んでいたのやし、ほんまにこの店にはおばはんしかいよらん、おばはんはおばはんでも、みんなしょぼくれたやつばかりやな、と戦争未亡人のおとよはん相手に悪態をついていた。おとよはんはそんなに大声で悪態をつきながら、悪態のあいの手みたいに、ここ看板になつたらな、いっしょにスシ食べに行こか、駅前のあんな「十円ずし」みたいなケチくさいとことちがうで、上六までタクシーで行つて、パリッとしたとこで食べる。エビのな、オドリ食わしたろ思うてんねん。悪態

つきながら、小声でおとよはんの耳たぶのたぶたぶした大きな耳にさきやき込み、おとよはんのほうもおとよはんのほうで、うち、オドリなんか食べたことあらへんねん、あれな、生きてるのをそのまま食べるやろ、こわいねん、とええかげんカマトトめいたことを言うてたのやから、あれでどうして、わたしひとりが共同便所のまえに眠りこけていたということになったのか。二日経ってまた「おぼはん」に出かけておとよはんにこわい顔で詰問すると、あのとき、安井はんのほうがひとりで「サイナラ」も言わんと出て行きはったんやないの、とまるで出て行つたのがわるいみたいなことを言う。二人でいっしょに出エへんなんだんか、とカマをかけてみても、いやらしいこと言わんといてエな、うちひとりで帰つたんですがな、ととりあわない。ほんとうのことを言うと、わたしは、今でもおとよはんがわたしひとりを共同便所のまえにおき去りにして（それも、スシを食べ、オドリをせいだいにほおばつてからや）逃げて行きよつたような気がしてならへんのやけど、わたしがそんな気持ちをこめておとよはんをにらみつけても、おとよはんはべつに眼をそむけもせんと平気でわたしを見返しとるのや。それで、お勘定のほうはどうやった、「サイナラ」も言わずに出て行きよつたんやろ、ちゃんと払って行きなはったか。わたしが自分のことをそう他人事みたいに言うとおとよはんも、まるでわたしがそのしょうのない酔いどれのドラ息子子の父親であるような口のきき方をした。へエ、払って行きはりましたで、それはそれでちゃんと。

なんや気分がわるうなつてしもうて、また、景氣づけに「おぼはん」で飲んだ。ケツタクソわるい、こんなところでもう飲んでやるもんかと思うたんやけど、関東煮の醤油くさいにおいがプンと鼻に来て、おぼはん、もう一本つけてんか、いうような声を聞いていると、やっぱし、こらえ性がなくなりませんやな。おまけに外は雨ですわ。十一月の夜雨が降って、ほら、歌にもありますな、夜雨の京極河原町、どこで飲むとて、人の世は……まあ、それで、飲んだ。さっきみたいに他人事めいた言い方をし

てもよろしい。それで、飲みはりましたで。それはそれで、ちゃんと。

コップ酒五杯でクダまき始めたこと、ようおぼえてます。何でおぼえているかというのと、わしもコップ酒五杯でクダまき始めるようになったか、弱うなったもんやな、やっぱし年やな、とはつきり思うたからです。はじめはおとよはんにむかってクダまいていたんやと思う。そのうち横手に並んで坐っていた、「おばはん」みたいな汚ない店にきちんとネクタイしめて来よった（あんな店は、夏やつたら、ステテコ姿で行くところや）銀行員みたいな男にむかってましたんやろ。顔はさっぱりおぼえてしません。何や知らんけど、ようおぼえてるのはしぶい柄の濃紺のネクタイや。ほんまに、どうしてやろ、それだけあざやかにおぼえている。

アケミのことを話してたんとちがうやろか。そんな気がしてしょうないんです。これもようおぼえてますのやけど、ひょいと、先日の夜のことか思い出されて来ましてん。つまり、アケミの涙や。アケミが泣いていよったことですな。このごろへんなくせがついて、わたしは酔って来るとコップ酒をときどき眼の高さにまで上げて、コップをすかしておとよはんの顔を見たり、「おばはん」のおばはん、つまり、店主、店の持主やな、木下ばあさんの顔見たりして嫌がられますんやけど、そのときもそれを始めていて、安井はん、そんなケツタイなことやめてエな、きしょくがわるいよって、ほんまにやめとくなはれ、とおとよさんに言われ、木下ばあさんに言われていた。そのうち、そのコップ・レンズで木下ばあさんの娘、御令嬢、「おばはん」の看板娘、スター、キイちゃんの下ぶくれにふくれた顔を見始めたんやと思います。キイちゃんが、いやらし、この人、と大仰に声をあげ、となりの銀行員みたいな男が、あんた、そないにして見たら、何ぞええもん見えますか、とからかうように言い、わたしはわたしで、見えまっせ、ここにいるオカメかて美人に見える、竜宮城みたいなもんですわ、美人もよりどりみどり、宝の山もある、とアホウなことをもうそのときには自分にも酔いが口の

あたりにまでまわって来たことが判る口調で言うた。そのときですがな、キイチちゃんは出戻りの二人の子持ちで、もう三十近いのやと思いますけど、それでも「おばはん」ではいちばん若いスターや、どっかに若々しいところが残っていて、そいつがコップのガラス、ガラスのなかの液体を通して見るとゆらゆらと浮かび上って見えた。あっ、アケミがそこにいると一瞬思うた。アケミのやつ、ここで、こんな「おばはん」みたいにしょうのない店で、大人の酔いどれ相手にアルバイトしてこいつめ、とつづけてどなり出そうとしたとたんに、涙がキラキラとキイチちゃんのいちめんに小じわの入ったホッペタに流れて、もうそのときには、たしかにキイチちゃんはアケミやった。

何でアケミが涙流してたんか。わけを言うとアホみたいなんです。わたししかアケミからわけ聞いたとき笑うてしもうた。前の日の夜、わたしが晩酌のホロ酔い気分でテレビのナイター見てたら、横でさっきから本読んでいたアケミが——まあ、そういうときは、何となく気配で判るもんですな、ひょいと気になって横を見ると、泣いてますのやがな。涙がほんまにきれいにホッペタに光って、女の子の涙いうもんはほんとうにいくらでも出るもんですな、眼のふちのところにいくらでもたまって、それからスウッとすじを引いて落ちて行きよる。こう言うて、えらいのんきに見ていたみたいですけど、正直言うて、何やひどうびつくりしてしもうてたんです。ドキリとしてしもうた。アケミの母親、つまり、わたしの妻のトシ子いうのがそんな女で、へいぜいはいつも陽気にケラケラ笑ってばかりいるのに、思いがけんとときに涙が眼から出て来て、それが出て来たとなると、ちょっとことですわ。わたしが気配で判るようになったというんも、長年の訓練のあげくかも知れませんが、トシ子の場合は、まず、鼻が赤くなる。トシ子は、顔の造作はまったくまずいですけど、肌は餅肌のきれいな肌で、それに色が白い。それだけいっそう赤鼻が目立つというわけですが、もうそないになって来たときには手おくれですな。なだめても、すかしても、こっちが何や知らんけどあやまっても同じで、涙

は流れる。涙が流れると、ことが起る。

そやよって、女子の涙見るとギクリとするようにトシ子と暮しているうちにいつのまにかなつてしまったんだすな。アケミのキラキラ光るホッパタを見たとき、あ、始まったな、ととっさに思った。何が始まったんか、自分でもさっぱり見当もつかない。それでも、始まったな、と、ただそれだけは思うたんです。始まった、ということは、手おくれになつてしまった、ということでもある。どないしてん、とわたしはアケミに言うたんですが、それは、一瞬間[＊]をおいてからやった。

「どないしてん。」

アケミが黙っているの、わたしはくり返した。ああ、またこの子のダンマリ戦術が始まったんかいな、と思いました。だいぶんまえのことになりますけど、一週間近くも黙り込んでいたことがあった。ことの始まりはつまらんことで、わたしがナイター見よう、アケミは、ナイターなんかつまらん、それよか「歌のグランプリ」を見よう、ということが始まった。よく新聞なんか書いてあるでしよう、テレビの「チャンネル争い」というやつで、わたしはたいいの場合はうるそうなつてアケミとカオリ（アケミの下の妹や。アケミより五つ下で、今年、六歳になる）の言うなりになつてしまうのですが、そのときは、わたしは何や意地になつてしもうてた。ひとつはわたしがひいきにしている南海が出るということもありましたけど、何ぞ昼間、仕事のことで面白くないことがあったんとかがいますやろか、アケミが何と言おうと譲れませんでした。最後にはアケミのホッパタにキラキラ光るもんが出て来よつたというわけやけど、その日はわたしは何が起つたてええ、山も裂けよ、地も割れよ、というようなわれながら健気な心境でいたんでしょな、それでも譲れしません。それにアケミの言いがシャクにさわつた。パパちゃんは南海のファンやいうけど、お金払つてナイター見に行きはつたことがあるか、いつでも座敷に寝そべつて半分ウツラウツラしながらテレビを見てはるだけのこ

とやないか、そんなもんファンと言えるか、今からでもタクシー拾うてナンバ球場まで行つてほんまのナイター見に行きはつたらええのや、ファン、ファンいうのやつたら、それくらいサービスを南海にしてあげなはれ——まあ、あらましそんなことをグジャラグジャ泣きじゃくりながら言うのたんですけど、十一歳かそこの女の子にこんなきついこと言われてみなはれ、ちよつと腹が立ちますで。それに、言い方がよくありませんのや。そんなイチャモンつけよるやり方はトシ子そっくりで、まあ、一口に言うたら、ねちっこいのですわ。こまかなことを次から次へもち出して、白アリがむらがつて大きな木の柱を食いつくすみたいなものです。そこで、わたしがいらいらして来て、おしまいにどなり出す。どなり出したところで、敵はだんまり戦術に移つて、半日でも一日でも、二日でも三日でも四日でも黙り込んでしもうて返事一つしよらんということになる。子供いうもんは親をそっくり真似るものですわ。ほんまにうまいこと真似しよる。結局、負けるのはこつちや。トシ子の場合で言うたら、三日目ぐらいになるとこつちも根負けして来て、いっぺん、「ふぐ助」のテツチリ食に行かへんか、とわたしが無気ないふうにもち出して、それでも黙り込んでいるので、もう一言、これはあとで自分ながら余計なことを言うたといつも思うのですが、このあいだのこと、すまんかったな、もう水に流そうやないか、わしもこんなことやっているのは辛いからな、と口をすべらせてしまふ。それでとにかく、ようやく口をきいてもらえるし、テツチリもふしようぶしよう食べてもらえるというわけですけど、アケミもそんなことを横でじいっと見て来とるんですやろな、ダンマリ戦術のあとで負けるのはわたしや。テツチリは高いよつて食べさせませんけど、駅前通りの喫茶店で、アンミツですわ、あれを食べさせたとやうてしまふのです。とやうたかて、トシ子にむかつてみたいにまさかこつちがあやまるいうわけではありませんで。そんなことはしてはいけませんわ。親が子にあやまるいうようなことはしてはいかん。このあいだの新聞見てたら、親でもまちがいをしたら率直に子

供にあやまるべきだと書いてありましたけど、そういうことはいかん。そんなことしたら、世の中のしめしがつかんようになります。やっぱし、親は親、子は子や。今日の若い父親や母親はそんなアホウなことをほんまにやっているのか知れませんが、それで、親を親と思わんような、先生を先生と思わんような子供がでてしまいますのや。あぐくのはて、ゲバ棒ふるうて、学校の窓ガラスこわしたり、何の關係もないわたしら市民の家までつぶしにかかって来よる。第一、先生自身がなつとらんのとちがいますか。アケミの担任の女の先生なんか、ええ年してミニ・スカートはいて、遠くから見たら、まるで、バーかキャバレエの女子おんなみたいや、ということです。一事が万事そうで、どだい、先生の性根がくさつとるのとちがいますやろか。ミニ・スカート先生でなかったら、赤旗先生や。赤旗先生でなかったら、アケミのまえの担任の辻先生みたいに胃病で、ろくすっぽ学校に出て来よらん。そら、人間誰かって病気になるますで。そやけど、勤めをズル休みするみたいなこととしてはいけません。わたしたしなんか見てみなはれ、四十度の熱出したときかて会社に出た。やっぱし、根性の問題やな。病いは氣から、というんやありませんか。

その根性がゆがんでしもうとるのですな。アケミの担任のミニ・スカート先生なんか、ええ例ですわ。そら、子供に作文書かせるのはよろします。字かて文章かてうまいにこしたことはありません。そやけど、何でもあつたこと書け、何でも思うたこと書け、というのんはまちがいとちがいますやろか。家の恥になるようなことまで書かしたりするのはキツパリやめてもらいたい。父親と母親が夫婦ゲンカをする。そしたら、昨日、パパとママがケンカをしました、と書くアホウな子があるいうんですな。昨日、ママにぶたれました、と書いた子もいます。ママはウソツキや、と書いた子もいる。アケミはまだそこまでは書きませんけど（あれでも、そんな心くばりはしてよるらしいですな）、このあいだ、月賦で電気アンマ器を買ったときなんか、買うか買わなかでまえの晩にもめたことから（う

ちはそんなもん要りませんで、とトシ子は言い、おまえが要らんかて、わしが必要んや。おまえの肩もまされるのほうかなわんわ。わしの肩なんか、おまえはもんでくれたことあらへんやないか、とわたしは言うた。月賦の額までくわしく書いて、まだそこまでやっただけのことでもなかったが、作文のおしまいところに、アケミはこないに書きよった。まだ、わたしはようおぼえていますわ、こんな高いお金出して、おまけに夫婦ゲンカしてまで電気アンマ器なんか買う必要があるか、うちやカオリちゃんなんかは子供で肩これへんのやから不公平とちがうやろか、子供の役にも立たんもんを高いお金を出して買うこともないやろ。読んでたら、何やなさけのうなって来て涙が出て来てしもうたとトシ子は言うんですけど、今日の子供いうんはほんまにきついこと言いよるもんですな。しかし、まあ、子供は子供でっせ。問題は先生や。この作文にあのミニ・スカート先生は三重丸つけていはって、これはこれでありがたいことでお礼を言わなければならんことですよけど、そのあと、赤インキで、よく書けました、アケミちゃんのくやしいきもちがよく出ています、と評書いてありますのんや。「くやしいきもちがよく出ています」とは、これは何ですもん。こんなことぬけぬけ書いて子供をおだてるもんやから、子供はますます親を馬鹿にするようになる。自分たちは労働者やとか何とか言うて赤旗振ってストライキなんかしているうちに、こんなことになってしもうているんですな。ほんまに世は末世です。末世も末世や。

アケミの涙の話をしているんだ。「おぼはん」でそいつを思い出したという話や。いや、そのまえにアケミのダンマリ戦術についてケリをつけとかないや。ものごとにはちゃんとけじめをつけ、ケリをつける。起承転結というもんがかんじんと、わたしも部下集めていつも言うんです。このまえアケミが一週間黙り込みよったときは、わたしも少しわかったと思うてますねん。ライターほんまに見えなかったらテレビなんか見んとタクシー拾うてナンバの球場まで行ったらええと

グジャラグジャいやみをアケミが言いすぎるもんやから、わたしはどうとう、何言うとか、このテレビはなわしが金出して買うて来たテレビやぞ、と言わんでもええことを口に出してしもうたんです。それで黙り込みですわ。まるまる一週間、口もきかずや。とうとうこっちが根負けして、このあいだからアケミが欲しがっていたシャープ・ペンシルを買うて来てやりました。いつもやったら駅前のお茶店のアンミツでことはすみますのやけど、今度はそうはいかん。デパート入ったついでに特売場で買うて来てやったんですが、それでも二百二十円とられた。えらい出費ですわ。

これで、ようよう、また、アケミの涙の話ですな。さっきも言いましたやろ、テレビでナイター見ている、ひょいと横見たら泣いてました。そのときには「チャンネル争い」も何もなかった。機嫌よくわたしはテレビ見ている、アケミは本読んでいた。それでひょいと気がつくと、涙や。キラキラ、ホッペタが光っている。どないしてん。わたしは言いました。二度、くり返して言うた。

「かわいそうやねん。」

「かわいそうて、何がかわいそうやねん。」

「象さんや。」

「……………」

「象さんがかわいそうやねん。」

何かと思うたら、アケミは象の絵本見ていたんですが。アケミの絵本やありません。カオリの絵本や。

「これ、見てみいな、かわいそうやで、象さんが……………」

わたしは見ました。「かわいそうな象」、なるほど、象が悲しげにこっちをみてますわ。絵描きいうもんはやっぱりうまいもんで、表紙の絵の象は、べつに涙は流していやらなかったけど、たしかに悲

しげに見えた。

戦時中に食糧がなくなったし、空襲になったら危険やいうて、動物園のライオンやトラやらを殺しましたな。象かて殺された動物の仲間やったんやけど、その象の話ですがな。東京の動物園の話やというんです。

はじめは食い物に毒を入れて殺そうと思うたらしい。象は利口な動物ですやろ、毒入ってると思うたら食いやらん。大きな鼻で毒の入ってる食い物だけまき上げて、ポイと捨ててしまひよった。それで、今度は注射や。何人がかりかで、大きな注射器もって象の背中によじ登ってる絵が描いてありましたけど、そっちの方も象先生の皮が厚すぎてうまくいかん。針が折れてしまひよったらしい。あげくのはて、餓死させることにして、食い物をやらんようにしたのやから残酷な話ですわ。食い物ばかりやなかった、水もやらんようにしよった。

「あんまりおながが減ったんで、象さんは芸当しはったんやって。」

「芸当？」

アケミの顔は何やそんなことも知りはらへんのかと言わんばかりの小生意気な顔に急になって、もうそのときは涙はとまっていた。

「動物園で、象さんに芸当させますやろ。ようけ客に来てもらおうと思うて。」

「どんなことするねん。」

「パパってしょうないなア、ボール転がしたり、台の上に登ってチンチンみたいなことしたり……」

芸当のあとでは、いつも食い物を食わせてもろとっらしい。それで、象も考えよったというわけや。芸当してみせたら、何かもらえるやろうと思うたんやな。

「象使いがかわいそうになって、食べ物食べさせてあげはったんやて。」